

「協和語」は引揚げと共に消えたのか？ —旧満洲国をめぐる接触言語の連続性—

甲賀 真広

1. 問題の所在

1932年に中国東北部に建国された旧満洲国には、数多くの日本人が住んでいた。厚生省援護局編(1977)によれば、終戦時には一般の日本人はおよそ155万人もいたという。日本人と現地中国人が交流することで、日本語と中国語が接触した「協和語」(以下、括弧省略)が用いられていたのである¹。この接触言語に関しては、多くの先行研究がある(大久保2010、岡田2020、金水2014、甲賀2017、桜井2015、東海林2011、張2012、前田2003、丸山1942など)。また、これらの研究の成果から協和語はある程度の全容がみえてきている。

一方で、この協和語がいつごろから使われ始め、いつごろから使われなくなったのかについては、あまり分析されていない。しかしその中でも、協和語の始まり、いわば萌芽期については、日清戦争に端を発したとする研究がいくつかある(桜井2015、張・于2019)。また、その終わりについては、桜井(2015)で以下のような指摘がある。

ピジン中国語は50年にわたり使われ続けた。これがクレオールとなることはなかったのであろうか。

ピジンがクレオール化する前提は、まず、ピジンを常用する家庭が存在することであろう。その家庭に子供が生まれれば、その子はピジンを第一言語として習得する。

ピジンを常用する家庭ができるには、2つの可能性が考えられる。まず、異なる言語の話者が結婚生活をすることである。しかし、日中間の通婚はほとんど行われなかった。

ただ、中国人のボーイが日本人家庭の中に入り、ボーイへの指示に使っていたピジン中国語が日本人の幼児の言語に影響を与えることはあった。

(略)

しかしボーイへの指示はごく限られた事柄にとどまる。幼児がそのいくつかの語彙・表現を覚えても、ピジンですべてのことを伝えることはできなかったであろう。母語はやはり日本語であり、その中に、中国語であることを意識しない語・表現がいくつか紛れ込む、という程度に終わったのではないかと思われる。

¹ 旧満洲国で使用された日中接触言語に対する名称についてはさまざまなものがある(桜井2015)。本稿では、この日中接触言語の研究者でなくともイメージしやすいものとして、協和語を用いる。なお、協和語は総称であり、中にピジン中国語、ピジン日本語、混合言語・・・など異なった言語現象が含まれる。それゆえに次に引用する桜井が言っている「ピジン中国語」は本稿で言っている協和語に含まれる。

もう一つは、ピジンが異言語集団間のリングフランカとなり、それが家庭内でも日常的に使われるようになることである。たしかに、日本人にも中国人にもそれぞれ方言を異にする人々がいて、共通語が必要ではあった。

「満州」に在住する日本人の間には、新たな日本語が生まれつつあった。しかし、それは日本語の方言の混交であり、そこにピジン中国語の語彙・表現が混入したものであった。ピジン中国語そのものがリングフランカとなることはなかった。

(略)

中国人は、苦力の間でピジン中国語を共通語としていたという記述がある。

(略)

しかし、ここから進んで、この共通語を母語とする子どもが出てきたと記す文献は見つげられない。

(略)

クレオール化、すなわち、これを第一言語として使うということには至らなかった。母語話者をもたない日中混交語は、日本人の引揚げとともに使われることはなくなったのである。 (桜井 2015:315-316、下線は筆者による)

このように桜井(2015)では、ピジンを第一言語とする者がいなかったこと、ピジンがリングフランカとはならなかったこと、旧満洲国から日本人が引揚げたことによって協和語は終わりを迎えたと述べている。しかし、果たしてそうであろうか。ここには重要な事実が指摘されていない。それは、中国残留日本人の存在である。終戦後、多数の日本人残留孤児、残留婦人が旧満洲国に取り残された²。彼らの母語は日本語であった。しかし、多くの証言があるように、彼らに限らず敗戦後の日本人は意図的あるいは半強制的に中国語を身に付けなければならなくなった(甲賀 2020a, b)。特に残留孤児の場合、中国人家庭で中国人として育てられる人もいた。したがって、中国に残留した日本人は日本語を母語とし、第二言語として中国語を身に付けた人であるということである。彼らが第二言語として身に付けた中国語は日本語の影響を受けたものであり、正確なものではないもの、つまりピジンの要素を含んだ接触言語としても考えられる。彼らの家庭内ではそのピジンの要素を含んだ接触言語が常用され、その子どもがそのピジンの中国語をクレオールとして獲得するというのは、十分に考えられる。

これまでこうした仮説は憶測の域を出なかったが、以下で紹介する新事実が発掘されたことによって検討が可能となった。そこで本稿では、この協和語のゆくえについて考察していく。

² 厚生省援護局編(1977)によって1950年5月に作成された「未引揚者統計」では、「満洲及び関東洲」は238,539人(うち生存者53,948人、死亡者158,099人、生死不明者26,492人)であった。

2. 接触言語としての協和語の分類

本節では、ロング・甲賀(2017)および甲賀(2017)を参考に協和語の接触言語としてどのように分類するかについて述べる。

両先行研究では、旧満洲国で使われた協和語の文字資料(絵葉書)を分析し、混合型の発話の中にある日本語と中国語のそれぞれの形態素の割合を調べている。ここで取り扱っている文字資料は戦時中の旧満洲国での暮らしを内地(日本国内)に伝えるためのプロパガンダ的な性格を持つものである。106枚の絵葉書に出てくる280文を集計した結果、延べ語数では日本語の形態素は72.8%(268形態素)で、中国語の形態素は27.2%(100形態素)だとしている。また、異なり語数は日本語の形態素137形態素(66.8%)、中国語の形態素68形態素(33.2%)であったことを明らかにしている。つまり、どちらの観点でも日本語の形態素と中国語の形態素の割合は7対3となっている。広い意味の協和語には確かに非文に当たるピジン化された中国語の発話も、非文に当たるピジン化された日本語も見られる。しかし、典型的なピジンは語彙供給の大部分が1つの言語に由来し、その他の言語に由来するものは通常20%未満である(セバ2013)。これを踏まえると、協和語は典型的なピジンではないという結論に至っている。

また、二つの起点言語をもつ接触言語として混合言語がある。混合言語は文法が単純化されずに用いられ、語彙も二つの起点言語でほぼ同じ割合で見られるという特徴がある(ロング2018、2012)。協和語の場合、日本語の部分にも中国語の部分にも非文に当たるピジン化された文があり、語彙もおおよそ7対3と同じ割合ではない。したがって、協和語は二つの起点言語をもつ接触言語ではあるが、典型的な混合言語とはいえないという結論に至っている。

これらをまとめると、協和語は2つの起点言語からなるという混合言語的な特徴を持ち、文法面ではピジンのような非文がみられるという特徴があるが、典型的なピジンとも混合言語ともいえないということになる。

3. 1970年に使用された協和語

本節では、1970年に使用された協和語についてみていく。

まず、はじめに、中国残留日本人が日本に帰国したときに産出した自然発話をみていく。ここで用いるデータは、1970年11月21日にNHKで放送された「ある人 二つの大地」のなかでみられた会話である。1942年に旧満洲国へ渡った家族が、1970年に2家族10人として28年ぶりに日本へ帰って来た際の家族内で用いられた会話である。番組では、長野県のある村へ帰って来た彼らのために、村民から歓迎会が開かれた様子が映され、その歓迎の場で赤ちゃんを抱いている女性(NHK2)と、その隣で一緒にあやす女性(NHK1)の会話があった。歓迎会の場ではあるが、この時の会話は帰国してきた家族のうちの2人でなされていた。なお、映像の中では、話題の焦点となっていた事柄(歓迎会の様子)の後ろで2人が会話しており、ほんの数秒間だけ映りこむような形であった。また、直後に場面も切り替わっていた。そのため、前後の話の流れはわからないことは留意されたい。また、番組は、彼女たちではなく、彼女の母親

(中国残留日本人)を中心に扱っていること、帰国を歓迎する村民の様子を注目して映し出していることから、NHK1とNHK2の会話が見つけれられたのはこのみである。

取り上げる例1の会話は、NHK1がNHK2に赤ちゃんに、「何か飲ませることができるか」と尋ねているものである。

この例1の発話は筆者が聞き取り、文字に起こした。本データは「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」で収集したもので、トライアルではデータの持ち出しが禁止されていたため、筆者が聞き書きを行なうしか方法がなかった。なお、文字起こし内のカタカナは中国語と思われる部分である。また、訳は筆者と中国語母語話者の二人によるものである。

本ドキュメンタリー番組はNHK1とNHK2の母親をはじめとした複数の中国残留日本人が中心の構成となっており、NHK1とNHK2の言語的背景については触れられていなかった。

例1：中国残留日本人家族による接触言語の使用（当初の聞き書き）

| | |
|------|---------------------|
| NHK1 | ショマショマなんか飲むヤンでホイブホイ |
| NHK2 | ホイ |
| NHK1 | ホイ |

3.1 データの日本語部分

まずはデータに見られる日本語の部分について分析を行なう。日本語は最初の発話にある「なんか飲む」があるが、「なんか」に関しては「なにか」が撥音便化したものだろう。また、次の「飲む」も特別な意味ではなく、「飲む」という意味と考えると差し支えがないだろう。

3.2 データの中国語部分

次に中国語の部分を見ていく。第一声の「ショマショマ」が中国語に当たると考えられる。中国語母語話者によれば、「ショマ」とは“什么(shén me)”であると考えられるという。これは多義語であり、「何か」や「どんな」、「何も」、「なんでも」などの意味を持つ。直後に日本語で「なんか」と言っていることから考えると、「ショマショマ」は多くの意味の中で「なんか」の意味が適当であり、その直後に日本語でも「なんか」と繰り返したとするのが自然だろう。なお、この事例では「ショマショマ」と言って、「ショマ」を繰り返した形で使われているが、中国語母語話者によれば、この疊語のような繰り返しでの使用はしないようである。

わかりやすくするために、発話の順番を変えて「ホイ」を先に説明する。NHK1とNHK2が言った「ホイ」は“会(huì)”で、意味は「できる」である。これは状況可能を表す。そして、「ホイブホイ」は“会不会(huì bú huì)”であり、意味は「できますか?」である。これは状況可能を尋ねる疑問文となる。赤ちゃんを抱いているNHK2に対して、

NHK1 が「赤ちゃんを抱いているという状況」で「何かをすることができるか」を尋ねる疑問文だろう。中国語の部分を表1にまとめた。

表1：中国語部分の解説

| 筆者による聞き書き | 漢字 | ピンイン | 意味 |
|-----------|-------|------------|-----------------|
| ショマ | 什么 | shén me | 何か/どんな/何も/何でもなど |
| ヤン | 让 (讓) | ràng | ～させる |
| ホイブホイ | 会不会 | huì bú huì | できますか？ |
| ホイ | 会 | huì | できる (状況可能) |

3.3 中国語部分の異なる解釈の検討

ここまで述べてきた日本語と中国語だが、これに対する異なる解釈も考えられる。そこで、念のために、このような文字起こしとなった過程を記述しておき、異なる解釈が出た場合の参考としたい。

3.3.1 「ショマショマ」

「ショマショマ」はこの文字を見ただけでは、初見の中国語母語話者は見当もついていなかった。そこで、筆者と彼女はインターネットで検索してみた。そうすると旧満洲国時代に「ショマショマ」を使っていたとするブログがいくつか出てきた。そこにはこう記されていた (例2)。

例2：ショマショマの使用例

ショマショマとは、韓国語、もしくは中国語であって、私の両親が隠語としてよく使っていた言葉です。父が満鉄の中央試験所と言うところで、頁油岩 (いわゆるオイルシェール) を研究していた頃、母は、中国語を、現地の人=教師=から習っていたので、二人は、よく中国語を使って、他人には、分からないように意見を交換していたものです。使用人の動きが緩慢で、あまり働かない人だと、「マンマンデーだね」とか。……ショマショマとは、雑多な諸事と言う意味です。マンマンデーとは、ゆっくりだねと言う意味です (『銀座のうぐいすから』³⁾)

³ 『銀座のうぐいすから』 <http://blog.goo.ne.jp/amesyun-goo/e/1d49f11554f399b5b950d4529fb494ee> 最終閲覧日 2021年2月3日

執筆者の父親は満鉄の研究所で働いており、中国語も使用していたようである。意味についての言及はないが、実際の使用例としては重要な指摘だろう。また、他にも、「『ショマ、ショマメーヨー』で何もなかった」や「ショマショマ・メーフアーズである」が記されたブログもあった（『瑞穂の国から出ておいで』）。これらがきっかけとなって、「ショマ」は“什么(shén me)”とするに至った。

3.3.2 「飲むヤン」

当初「飲むやん」の「やん」は日本語かと考えたが、『方言文法全国地図』で話者の親の地元長野、および旧満洲に多くいた九州を見ても相当するものは見当たらなかった。そこで中国語母語話者に相談して中国語の可能性を探ることにした。状況や意味から、「なんか」「飲む」「ヤン」「できますか?」で考えられたのは、「なんか飲ませることが出来ますか?」であった。つまり使役である。使役は中国語では“让(ràng)”と“给(gěi)”がある。このうちの“让(ràng)”の発音を聞くと、それは筆者が聞き取った「ヤン」と酷似していた。したがって、筆者が当初「ヤン」と聞き書きしていたものは、実際には中国語の“让(ràng)”であったということである。

このような過程を経て、「ヤン」を状況および意味と音から考え、日本語の方言ではなく、中国語の“让(ràng)”とするに至った。

3.3.3 「ホイブホイ」「ホイ」

「ホイブホイ」はNHK1の発話の中で最もカタカナで表記しやすく、また中国語であると理解しやすい部分であった。そのおかげで、「ショマショマ」や「飲むヤン」よりも先に中国語の訳を考えていた。カタカナで表記しやすかったとはいえ、中国語がほとんど分からない筆者が書き起こしたものである。それもあり、中国語母語話者が見ても意味が分からなかった。そこで、日本語の意味から中国語を考えてもらうことにした。その時に考えた日本語の訳は「なんか飲ませてもいいですか?」であった。NHK2が抱えている赤ちゃんにミルクなどを飲ませたかったと考えてのことである。この訳を踏まえると、この部分は中国語で“好不好(hǎo bù hǎo)”となるのではないかと指摘された。そうすると会話はこのようになる。NHK1が「ショマショマなんか飲むやんでホイブホイ（なんか飲ませてもいいですか?）」と聞き、NHK2が「ホイ（いいですよ）」と返答、最後にNHK1が「ホイ（どうぞ）」と言うという流れである。

確かに、この訳でも意味が通るが、「飲むやん」の訳を「飲ませても」としている。しかし、「やん」にそうした意味が考えられないため、もう一度“好不好(hǎo bù hǎo)”から離れて考えることにした。状況はこうである。赤ちゃんを抱えている女性とその隣にいる女性。赤ちゃんを抱えている女性は両手がふさがっている。だからこそ、「(代わりに)飲ませてあげようか」という申し出だと考えた。中国語母語話者と検討を重ねた結果、「その両手がふさがっている状況で何か飲ませることが出来ますか」という訳に行きついた。状況可能である。それに鑑みて「ホイ」は“会(huì)”，「ホイブホイ」は“会不会(huì bú huì)”とした。この発音も“好不好(hǎo bù hǎo)”よりも似ていた。

「協和語」は引揚げと共に消えたのか？

このように状況と意味から考え「ホイ」は“会(hui)”、「ホイブホイ」は“会不会(hui bú hui)”とするに至った。

3.4 1970年に使用された協和語のまとめ

このような過程を経て、二つの言語からなる文であると結論付けた。つまり、これは中国語と日本語を混ぜたことばなのである。この発話は、日本語を母語とし第二言語として中国語を身に付けた親を持つ子どもによるものである。つまり、ピジンのような要素を含む中国語が家庭で常用され、それを子どもが身に付ける過程でクレオールとなったと考えられる。つまり、日清戦争期に萌芽した協和語は、姿を変えて1970年になっても使用されていたということである。

以下で、当初の聞き書きから検討した結果を踏まえて例1を再掲し、その解釈と意味を加えた例1'を提示する。

例1 中国残留日本人家族による接触言語の使用（当初の聞き書き）

NHK1 ショマショマなんか飲むヤンでホイブホイ
NHK2 ホイ
NHK1 ホイ

例1' 中国残留日本人家族による接触言語の使用（解釈と意味）

NHK1 shén me shén me なんか飲む ràng で hui bú hui
(なんか飲ませることができますか?)
NHK2 hui
(出来ますよ)
NHK1 hui
(出来ますか)

もちろん、部分的な発話であるため、この言語変種の全体像は見えていない。しかし、中国残留日本人に関する研究には蓄積があり、言語接触研究の観点からの再考察の余地は十分にある。これまで、桜井(2015)でその存在が否定されているように、旧満洲国に関するクレオール研究は、管見の限りほとんど行われていなかった。これは、文献を中心に研究がなされていたからである。今回分析対象とした映像データによって、新たな研究の可能性を示すことができたといえるだろう。

4. 2020年に使用された協和語の連続体

既述の通り、旧満洲国には中国残留日本人がいた。彼らはメディアでもしばしば取り上げられ、現在もドキュメンタリー番組などの取材を受けている。ここでは、そのドキュメンタリー番組内での中国残留日本人の発話を分析する。

まず、分析対象としたドキュメンタリー番組および登場人物を概説する。このドキュメンタリー番組は2020年10月11日にNHKで放送された「目撃! にっぽん『ふるさとへ まだ遠く—“中国残留孤児”が生きた75年—』」である。中国残留日本人向けの介護施設に密着し、その活動を紹介している⁴。

ここで分析する女性TI氏は、中国残留孤児であった。終戦後の混乱期に両親と生き別れ、中国人に拾われた。その後、5つの家庭に転々と売られ、学校にも通えなかったようである。18歳で中国人の男性と結婚し、2人の間には子どももいる。そして、1982年(当時44歳)に日本へ帰国した。帰国後から肉親を捜すが、放送当日(2020年10月11日)まで肉親は見つかっていないという。帰国直後のインタビュー映像では、中国語しか使用していない。この当時、日本語が話せるおよび話せない等の説明はなかった。

本節で分析対象とするTI氏の発話は次の例3、4である。例3はTI氏が美容院で経験したことを語った談話、例5はTI氏と息子(S)との会話である。

これ以外にも、同じ番組に出てきたYS氏の発話も分析する。YS氏は2020年現在84歳で、同年2月に妻を亡くした男性である。YS氏は4歳で開拓団として旧満洲国に渡った。戦後の混乱で両親が亡くなったため、兄により中国人家庭へ売られた経験を持つ。また、その中国人養父母には中国人のように育てられたという。例5は介護サービス員がYS氏のもとを訪問し、YS氏が近況を報告しているものである。なお、この介護サービス員は中国残留孤児3世であり、日本語と中国語が堪能である様子が映されていた。

なお、本ドキュメンタリー番組はこれらの発話者だけが取り上げられていたわけではないため、それぞれの発話者の言語的背景は未詳である。

例3：日本語と中国語が混ざった経験談

| 実際の使用例 | 中国語母語話者による訳 |
|--|--|
| <p>TI 剪头去、一个老太太给我剪头、她看我说话中国味儿出来了、她说「中国人、中国人ずるいよ」她说的是坏话、我连上就「どうしてうるさいの？私中国人じゃないよ、私中国人、私日本人」</p> | <p>TI 美容院であるおばさんに髪を切ってもらった。切り終わると、彼女は私の中国語なまりに気づいて、「中国人はずるいよ」と悪口を言った。私はすぐ「どうしてうるさいの？私中国人じゃないよ、私日本人」と言い返した。</p> |

⁴ 介護施設利用者の9割は中国残留孤児とその家族であり、一種のコミュニティが形成されている。

例4：日本語と中国語が混ざった息子との会話⁵

| 実際の使用例 | 中国語母語話者による訳 |
|---|---|
| TI 小さいから、お父さんお母さんないから、做了饭就给扔一边儿去了、啥也吃不着 | TI 小さいころ、お父さんとお母さんないから、ご飯を作ったら、横に置いておいた、ロクなもの何も食べられない |
| S 社会也不一样、没办法那个时候啥也没有 | S 社会が違ってたからでしょう、その時何にもないじゃん |
| TI 对 | TI そう |
| S 现在多好呀、在日本有吃有喝 | S 今のほうがいいじゃん、何も困っていないでしょう |
| TI いまは幸せや ⁶ | TI いまは幸せよ |
| S 所以现在幸福就好了 | S だからいまが幸せだったらいいです |

例5：日本語と中国語が混ざった近況報告

| 実際の使用例 | 中国語母語話者による訳 |
|--|---|
| YS いや、寂しいわ、ちょっと没有待一起唠嗑、喝点酒有意思、一个人想吃也是... | YS いや、寂しいわ、ちょっと、皆と一緒におしゃべりしたり、お酒を飲んだりしたほうが楽しい、独りぼっちだったら、食べたくても... |

4.1 混合言語かコード・スイッチングか

例3、4、5のいずれも日本語と中国語が混ざっている。言語接触論において、2言語が混ざっていた場合、混合言語かコード・スイッチングかのどちらかを判断することが重要である。つまり、日本語と中国語が混ざったことばの実態を探ることで、接触言語としてどのように分類できるかを知ることができ、さらには協和語との連続性についての手掛かりとなるからである。

なお、3節で分析したものは、日本語と中国語の2言語が接触したクレオールと述べたが4節の発話はクレオールではない。クレオールはピジンから発展する際に文法的に再構築がなされる。これにより、クレオールであった場合、起点言語話者が聞いても理解ができなくなっているからである。しかし、例3、4、5のいずれも日本語部

⁵ 最初の「小さいから、お父さんお母さんないから」と「做了饭就给扔一边儿去了、啥也吃不着」の間に、画面の切り換えがあり、1つの発話であるかは不明である。

⁶ TI氏の「いまは幸せや」という発話については、日本語母語話者である筆者は「いまは幸せや」と聞こえ、中国語母語話者は「いま我(wó)幸せ呀(yā)」と聞こえたと言語意見が分かれた。本稿では、筆者と中国語母語話者と再度話し合い、日本語の「いまは幸せや」とした。

分は日本語母語話者が聞けば、中国語部分は中国語母語話者が聞けば理解できる。そこで本節では、混合言語とコード・スイッチングのどちらに近いかを検討する。

ここでは、小笠原混合言語を混合言語がコード・スイッチングとどう違うかを検討しているロング(2018、2012)の枠組みを援用し考察する。

まず、混合言語とコード・スイッチングについて概説する。混合言語は2言語が接触した接触言語である。特徴として「ピジン・クレオールと違って文法構造の『崩壊と再構築』は見られない(ロング2018)」ことが挙げられる。一方、コード・スイッチングは言語変種の切換えを意味する。つまり、2言語が混ざっているとき、一つの言語体系としてとらえるか(混合言語)、2つの言語は独立しており、それが切り替えられているだけととらえるか(コード・スイッチング)という違いがあるのである。

ただし、両者は、一見しただけでは判断がつきにくい。ロング(2018、2012)でも、小笠原混合言語も「度々単なるコード・スイッチングと言われて来た」と述べられている。では、例3および4、5に見られる発話は混合言語かコード・スイッチングかどちらであるのだろうか。実際に検討していく。

4.1.1 言語意識面からの検討

小笠原混合言語話者は、「英語と日本語を混ぜているだけだ」という意識を持つ人が少なくないという。一方で、その自分たちのことばに「コンプレックス」(劣等感)も抱いている。しかし、小笠原混合言語は彼らの母語になっているために、混ぜて使用することがやめられない。そして、自分を表現する手段としてもそれを使わざるを得ない。つまり、ロング(2018、2012)では、言語意識面から小笠原混合言語は一つの言語体系として結論付けている。

他にも、彼らは混ぜたことばに対して文法性判断が行なえるという点も指摘している。ある言い方が「(小笠原混合言語として)自然に聞こえる」あるいは「変に聞こえる」という判断ができるのである。つまり、小笠原混合言語として「使える混ぜ方」、「使えない混ぜ方」があるということである。

例3、4、5もこの2点から考察する。いずれの例も、「中国語と日本語を混ぜているだけだ」という意識であることが考えられる。しかし、TI氏の第一言語は中国語で、日本語は第二言語となっていることは番組の他の談話から明らかである。しかも中国語のみの発話が長く続いている場面も、日本語のみの発話が長く続いている箇所も見受けられる。したがって、<混ぜずには話せない>わけではないと推察できる。

また、文法性判断ができるかという点においても考えにくいだが、文法性判断ができるかは話者にしかわからず、「考えにくい」という結論にしか及ばない。

以上、言語意識面から検証したが、ここでは、一つの言語体系ではなく、コード・スイッチングととらえるのが妥当であろう。特に、例3は引用を日本語で発話しているだけであるため、コード・スイッチングと判断し、以降は言及しない。

4.1.2 言語使用面からの検討

小笠原混合言語は、「身内言語(ingroup language)」である。どういうことかという、小笠原混合言語はよその者との間で使うコミュニケーション手段(リングフランカ)ではなく、小笠原混合言語話者同士で用いるものであるということである。身内で話すのであれば、わざわざ混ぜる必要はない。しかし、混ぜたものが自然と出てくるといことは、それが彼らの母語であり、1つの言語と判断できる(ロング2018, 2012)。

例4は、家族に対する会話である。つまり、使われているものはまさに「身内言語」といえる。TI氏は息子に対して日本語と中国語を混ぜたものを自然に用いていることから、1つの言語体系として成立している可能性が示唆される。また、例5をみても、なじみのある訪問サービス員への発話であることを踏まえれば、身内へのことばであり、そのうえでそれが自然に使われている。このことから1つの言語体系として成立している可能性が示唆される。

4.1.3 言語能力面からの検討

小笠原混合言語話者のなかには、「日本語が弱い」あるいは「英語が弱い」と嘆く人がいる。弱いと意識している言語だけを使用した場合、ことばが不自由という印象を受ける場合さえあるという。しかし、混ぜたことばの場合は、自分を満足に表現できないことはないようである。

この点について例4, 5をみる。彼らは中国語が第一言語となっており、日本語は第二言語であった。つまり、混ぜて初めて自分を満足に表現できるというよりも、中国語だけでも満足に表現できるのである。したがって、言語能力面からは、コード・スイッチングと判断できる。

4.1.4 言語習得面からの検討

小笠原混合言語話者は、日本語と英語を別々の言語体系として習得し、それを慣習的にミックスするようになったのではなく、小笠原混合言語を第一言語として獲得している(ロング2018:379)⁷。

一方、TI氏とYS氏は日本語→中国語→日本語というように、獲得している。つまり、混ぜたものを獲得したのではなく、日本語と中国語を別々の言語体系として獲得し、それを混ぜて使っているのである。つまり、言語習得面からみると、コード・スイッチングと判断できる。

4.1.5 言語構造面からの検討

言語構造面について、ロング(2018, 2012)で以下のように5つの点を指摘している。

(1)小笠原混合言語は、日本語と英語それぞれの音は原音で発音されるという。つまり、日本語と英語の発音で「外人なまり」を感じることはない。

⁷ ロング(2018, 2012)では話者3名の例を挙げ、彼らが小笠原混合言語を第一言語として習得したことが述べてられている。

(2)現代日本語の借用語においては「コミット」「エビデンス」「アサイン」「ペンディング」のような内容形態素がよく取り入れられるが、代名詞は少ない。一方で、小笠原混合言語では、代名詞などの機能形態素が取り入れられている。しかも英語では格変化や単・複数の区別がある(例: I, my, me, us)が、小笠原混合言語ではそれがない(例: me のみ)。つまり、英語とも日本語とも異なる特徴を持つということである。

(3)小笠原混合言語では、数字と助数詞は英語起源が極端に多い。ロング(2018, 2012)では次の例が挙げられている。「あと about three kilos で sundown (残り3キロのところで日が沈んだ)」、「me らは one week ぐらいそこにいたよ」などがあり、他にも day before yesterday (一昨日) や、year after next (再来年) などにも拡大している。

(4)小笠原混合言語では、専門用語のような「難しい単語は英語から入っている」。

(5)小笠原混合言語は、基盤言語(matrix language)の日本語、埋め込み言語(embedded language)の英語、両言語の正確な文法的知識をもとに混ぜて使われている。次のような例が挙げられている。「water が up to the knee だった」は日本語に置き換えると「水が膝まで上がってきた」である。日本語では「膝+まで」という語順であるが、英語では「up + to + the + knee」という語順になっている(名詞が先に来るか後に来るか)。また、定冠詞の the が必要だという知識も必要であり、小笠原混合言語では、こうした文法能力が求められる⁸。

では、例4、5ではどうだろうか。

(1)今回は文字起こしにあたって、正確な発音まで記述しなかったが、日本語の部分で「中国人なまり」を感じる。また、日本語母語話者と中国語母語話者の間で日本語か中国語かで意見が分かれたほど曖昧な発音もあった。

(2)例4では「お父さんお母さんないから」と「から」という機能形態素が使用されている。小笠原混合言語では日本語の中に英語が取り込まれるが、例4は中国語に日本語が取り込まれ、さらには機能形態素まで取り込まれているのである。

(3)限られた例文しかなく、今回は判断ができない。

(4)既述の(3)と同様に、今回は判断ができない。

(5)今回の例文のなかでは、日本語においても中国語においても非文はなかった。つまり、この例文における文法的知識には誤りはないといえる。

以上、(1)-(5)の項目から考察したが、言語構造面からみると、例4、5は(1)でコード・スイッチングの特徴、(2)(5)で混合言語的特徴を有すると考えられる。

4.2 混合言語かコード・スイッチングかの結論

ロング(2018, 2012)の小笠原混合言語をコード・スイッチングとは違い1つの言語であることを5つの側面から検証した手法を援用し、例3、4、5を考察した。結果は以下の通りである。

⁸ ロング(2018, 2012)では、日本人が英単語を臨時借用として取り入れる際には、こうした文法の知識は不要だとし、文法的に間違った英語が使われることもあることも指摘している。

- 4.1.1 言語意識面からはコード・スイッチングの特徴が見られた。
- 4.1.2 言語使用面からは1つの言語体系（混合言語）として成立している可能性があることを指摘した。
- 4.1.3 言語能力面からはコード・スイッチングと判断した。
- 4.1.4 言語習得面からもコード・スイッチングと判断した。
- 4.1.5 言語構造面からはコード・スイッチング的特徴と混合言語的特徴がみられた。

今回の検証では、混合言語とコード・スイッチングの両方の特徴がみられたが、現状では、コード・スイッチングとするのが妥当であると考えられる。言語使用面の「身内言語」であることは無視できないが、慣習となっている可能性も否定できない。また、混合言語と結論付けるためには、コード・スイッチングと判断される面よりも混合言語と判断される面が多いだけでは不十分で、基本は5つの面、すべてで混合言語と判断される必要がある。したがって、これらに鑑みて、本研究では例3のみならず例4、5もコード・スイッチングと結論づける。

一方で、今回のデータから一つの言語として体系化されていないという結論を出すことに対して、悲観的にとらえてはいない。というのも、今回はデータが限られていながらも、限られたデータの中からでも部分的には混合言語的特徴がみられることがわかったからである。つまり、今回のデータが日清戦争から萌芽した協和語の現在に至るまでの連続性を考えるうえで重要なデータとなるということである。

5. おわりに

本稿では、日清戦争期に萌芽した旧満洲国における接触言語である協和語の現在に至るまでの連続性について分析した。従来の研究では、協和語は日本人の引揚げとともに使われなくなったと考えられていた。しかし、本稿ではこれまで分析されてこなかった映像資料を基に、現在に至るまで協和語の連続体とも言える言語体系が使用されていることを明らかにした。特に、1970年の映像からは協和語が発展したクレオールと示唆される言語変種があることを指摘し、2020年10月の番組で用いられた、2言語が接触したことばをコード・スイッチングと結論付けた。なお、このコード・スイッチングと結論付けた発話には、部分的に混合言語の条件に当てはまる側面もあり、今後さらなる分析が必要である。

2020年の番組には、取り上げた2名以外にも数多くの中国残留日本人が同じ場所で介護サービスを受けていた。同じ場所で生活する彼らが、現在どのようなことばを使用しているかについては、研究は未だない。今後の課題として、彼らの言語について分析していきたい。

参考文献

大久保明男(2010)『『満洲国』中国語作家の語言環境と文学テキストにおける

- 言語使用」王徳威・廖炳惠・松浦恒雄・安部悟・黄英哲編『帝国主義と文学』研文出版、pp.202-235.
- 岡田祥平(2020)「鮎川哲也『ペトロフ事件』に観察される、旧満洲地域における『日中ピジン』」『日本語学会 2020年度秋季大会』pp.179-184.
- 金水敏(2014)『コレモ日本語アルカー異人のことばが生まれるとき』岩波書店
- 甲賀真広(2020a)「複言語社会としての旧植民地における言語的特徴—日本人の言語経験に関するケーススタディー—」『日本語研究』40、pp.29-42.
- 甲賀真広(2020b)「旧満洲国公主嶺における日本人の言語経験—終戦を境にした言語使用状況のパラダイムシフト—」『日本語学』64、韓国日本語学会、pp.101-118.
- 甲賀真広(2017)「旧満洲国在住者の言語接触史—文字資料とオーラルヒストリーのインターフェースを目指して—」『日本語研究』37、pp.105-120.
- 厚生省援護局編(1977)『引揚げと援護三十年の歩み』厚生省
- 桜井隆(2015)『戦時下のピジン中国語—「協和語」「兵隊支那語」など—』三元社
- 東海林万結美(2011)「満洲国における特殊な言語—協和語—」『帝京日本文化論集』18、pp.196-216.
- 張守祥(2012)「満洲国地域における言語接触—写真資料からみる日本語普及史—」首都大学東京博士論文
- 張守祥(2011)「『満洲国』における言語接触—新資料に見られる言語接触の実態—」『人文』10、学習院大学、pp.51-68.
- 張守祥・干湘泳(2019)「近代史上の中国北方地域における中日言語接触—連続体として捉える『協和語』—」『比較文化研究』134、pp.133-145.
- 前田均(2003)「在外児童作文集に見る言語混用の実態—日本語と中国語を主にして—」小島勝編『在外子弟教育の研究』玉川大学出版部、pp.217-240.
- 丸山林平(1942)「満洲國に於ける日本語」朝日新聞社編『国語文化講座 第6巻 國語進出偏』朝日新聞社、pp.120-136.
- ロング、ダニエル(2018)『小笠原諸島の混合言語の歴史と構造—日本元来の多文化共生社会で起きた言語接触—』ひつじ書房
- ロング、ダニエル(2012)「小笠原混合言語は本当に『言語』なのか—5つの側面からの検証—」『日本言語文化研究会論集』8、政策研究学院大学日本言語文化研究会、pp.29-37.
- ロング、ダニエル・甲賀真広(2017)「接触言語の分類に関する量的研究—起点言語の割合を通して—」『人文学報』517-7、pp.105-120.

(こうが まさひろ・東京医科歯科大学)